



学校だより



令和5年5月31日
第3号 江戸川区立瑞江小学校

啐啄の機

校長 中村 敬子

校庭の木々の緑が一層深くなってきました。5月20日（土）の運動会では、多くの地域の方々、保護者の皆様にご参観いただきありがとうございました。朝の段階では小雨が降っていたので開催が危ぶまれたのですが、早朝より教職員のお手伝いをいただいたPTAの方々、ダディーズの皆様ののおかげで予定の時刻通りに始めることができました。また、片付けでも多くの方々のお手伝いをいただき、本校がいかに地域の方や保護者の方々に支えられているか実感した1日でした。



さて、校長室にはこのような書が頭上に飾られています。ずっと読み方や意味が気になっていたのですが、先日、国語の研究で講師としておいでいただいている細川太輔先生に教えていただきました。「啐啄の機」（そったくのき）と読み、同じ意味の言葉に「啐啄同機」「啐啄同時」という言葉があるそうです。意味は、「卵の中のヒナ鳥が殻を破ってまさに生まれ出ようとする時、卵の殻を内側から雛がつつくことを「啐」といい、それに合わせて親鳥が外から殻をつつくのを「啄」という。雛鳥と親鳥が、内側と外側からつづくタイミングが一致することで、殻が破れて中から雛鳥が生まれ出てくる。」という意味で、両者の動作が一致することにより目的が達せられる「両者が相応じる得難い好機」のことを「啐啄の機」あるいは「啐啄同時」というそうです。

この言葉から、私は二つ考えました。一つは教師としてまたは親として子どもたちへかかわる時に、まさにタイミングを合わせて指導したり支援したりしていくことで、大きな教育効果を生み出すということです。そのためには、いつ頃、殻が内側からつつかれるのか機を逃さないことが大事です。一人一人の子の成長する時や成長する内容を、普段からよく観察しながら見極め、殻がつつかれた時にその子にあった指導や支援をしていきたいと思いました。

もう一つ考えたことは、子ども自身が「自分の殻を破る」ということです。例えば先月の運動会が「自分の殻を破る」機会になった子がいます。また、普段の授業の中での友達のさりげない言葉が「自分の殻を破る」ことになっている子もいます。「瑞江の園」にいた昆虫が「自分の殻を破る」きっかけになった子もいます。子ども自身が内側から殻をつつく機会や環境を、大人はいかに作っていかないといけないかと考えました。

「啐啄の機」この言葉から学んだように、子どもの学びを支え、自立を促す者として、子どものサインを逃さず、子ども自身が自分の殻の中からつづくことができる環境や機会を作っていきます。